

令和3年度 2021年 活動報告

堀田健治

はじめに

本年度、昨年に引き続きコロナ禍のため、協会としての活動計画そのものが立てられなく、各研究会、あるいは個人の活動にとどまらざるを得なかった。シンポジウムについても2年ほど開催できなかったが、このままだと、会員離れも起こすことが心配され、また一方では、コロナのかかわらず、温暖化に伴う海藻を取り巻く育成環境、さらに流通・加工状況が変化している現状にあって、コロナ禍で一般的となったZoomにより、オンラインシンポジウム 第19回「温暖化が海藻資源に及ぼす変化と藻場造成」を開催した。

以下、例年より継続している計画について以下にまとめる。

1. 種糸支援事業

本協会の主要な活動の一つである種糸斡旋事業、本年は

ワカメ 6 枠 (90m) @3705 円/枠

コンブ 37 枠 (100m x 37 = 3700m) @24292 円/枠

種糸長は、合計 3,790m となった。

2. ニュースレターの発行

第20号ニュースレターの内容：1) 中国の昆布に寄せて、2) 北海道の昆布生産について、3) 徳島県におけるワカメ養殖の現状と展望、4) ノリ養殖の現状と展望、5) 農水畜産 SDGs 複合エコ養殖、6) 千葉の海づくり、7) 新たなる海洋産業のチャンス到来！、8) 民生官合同要望活動発表における要望と回答の記事に加え、九州支部の照会、役員等、38 ページのポリュームあるニュースレタを発行し、会員に配布するとともに、シンポジウム、新たな会員募集用に用いた。

なお、本年度門脇秀策副会長、斎藤 浩理事が中心といなって「複合エコ養殖研究会」が発足した。

3. シンポジウム

第19回 海の森づくりオンラインシンポジウム、テーマ：「温暖化が海藻資源に及ぼす変化と藻場造成」が11月27日、日本大学工学部船橋校舎を会場として、星上教授中オンラインシンポジウムが開催された。

第1部「温暖化と海藻資源の変化」では、1) 温暖化と海藻植生の変化、2) 温暖化と海外有用海藻資源の変動、3) 貝殻付着人工藻場の遷移と魚類の蟄集にについて。また第2部の「藻場造成の事例紹介」では、現在、国の温暖化防止に伴い、海洋再生可能エネルギー利用促進から多くの洋上風力発電施設の計画が進んでいることから、この発電施設の

大水深部空間に藻場造成をはじめ漁礁を設置しながら水産をはじめとする各種有効利用ができれば、双方にとってメリットが得られると考え、1) リーフボウル型藻場造成構造物を用い、大水深海域での藻場造成効果、2) 近年 LED を用いた人工照明による、藻類育成実験が行われ、成果が出ている、その他まりのフォーラムでも過去研究成果が見られる、これらを踏まえながら新しい可能性についてチャレンジする発表があった。

4. 研究会報告

アカモク研究会（代表 堀田健治）

本年1月、東安房漁協の協力を得て、コンブ種付け作業を実施し、生育状況を見守ったところ、昨年とは異なり順調に生育した。本年は小規模育成にとどめたが、来年水温が回復すれば十便期待できると観察された。竹岡のアカモクについては問題なく、十分な生育が観察できた。

5. ホームページ

本年も山崎 IT 担当理事により、多くの記事がホームページを飾ることができました。本年は4月2日の記事から3月5日まで、多くの寄稿や情報その他シンポジウム、各研究会、等の記事36件が紹介されました。その他お知らせとして千葉でのコンブ育成参加募集やモニタリング報告など折に触れた記事が掲載されるなど、会員へのサービスの他、サイトを訪れるビジターも含めると3万人を超えています。

4. 九州支部活動

池田修 支部長を中心とした、リーフボウルによる藻場造成実証実験が、各地で行われた。